

# 臨死共有体験証言のテキストマイニング

中本 裕大

和光大学 現代人間学部 心理教育学科 三年生

## 1 問題と目的

### 1.1 はじめに

臨死体験は 19 世紀後半から世界各国で報告されている。しかし日本国内での研究は少なく、未だに謎の多い分野である。

臨死体験への理解や認識が十分でないためか、臨死共有体験も一括りに扱われる場合が多く、また体験談の数も臨死体験のものより格段に少ない。

これらの研究は体験者の話を聞くことでしか進めることが出来ず、研究が非常に困難な分野でもある。

そのため、本研究では貴重な臨死共有体験の体験談に着目した。明確に臨死共有体験だと判断できる体験談をまとめたものは、研究を行う上で重要な記録である。

本研究では著書を通して、臨死共有体験とは一体どんなものなのかという点や、体験談ごとの共通点と相違点、性別職業年齢人生観も全く異なる人たちの共有体験時にどんなものを見て感じるのかに焦点をあて、体験者の話に着目する。

### 1.2 研究対象として分析した文献

レイモンド・ムーディー ポール・ペリー(2012)

『永遠の別世界をかいま見る 臨死共有体験』(ヒカルランド) を分析対象とした。

本書の内容はレイモンド・ムーディーに語られた様々な臨死共有体験をもとに、臨死共有体験をムーディーが科学的に考察したものである。全 7 章で構成され、ムーディー自身を含む 21 名の人の体験が掲載されている。

### 1.3 仮説

筆者は本研究における仮説を立てた。

#### 仮説：臨死共有体験中に目撃したものの共通性

臨死体験には世間一般に広まっているイメージが存在する。それは三途の川であったり、一面の花畑であったりする。それらは少なからず過去の体験者の発言から生まれたものである以上一定以上の信憑性があると考えられる。臨死共有体験にもこのような一定の共通点が存在していると仮説をたてる。

## 2. 目的

本研究の目的は、臨死共有体験を経験した本書内から、様々な臨死共有体験の共通点について仮説を通して考察し、臨死共有体験への理解を深めることである。

### 3. 方法

#### 3.1 分析対象：分析の対象とした本とその理由

レイモンド・ムーディー ポール・ペリー著(2012)『永遠の別世界をかいま見る 臨死共有体験』を研究対象とした。

本書を取り上げた理由として、貴重な臨死共有体験の様々な体験談が一冊に詰められているため、本研究に非常に適切な作品であると判断した。

#### 3.2 分析方法

これら臨死共有体験者の語りをテキスト化し、Text Mining Studio Ver.6.2により、テキストマイニングの手法を用いて内容語の分析をおこなった。語りのデータは書籍の構成に従い、1章、1行として入力した。

分析は、テキストの基本統計量、単語頻度解析、ことばネットワーク、評判抽出の順に行った。

#### 3.3 倫理的配慮

すでに公表され、市販されている書籍の内容を用いた分析であるため、倫理的配慮は著作権に配慮する他は特に必要がない。

### 4. 結果

#### 4.1 基本情報

表1はレイモンド・ムーディー ポール・ペリー著(2012)『永遠の別世界をかいま見る 臨死共有体験』に掲載されている体験談すべての基本情報である。総行数は体験談の総数を表しており、21行であった。一章当たりの文字数を表す平均行長は718.2文字であった。総文章数は452文で、平均文長は33.4文字、総単語数は3397、単語の種類は1184種であった。

表1 基本情報

	項目	値
1	総行数	21
2	平均行長(文字数)	718.9
3	総文章数	452
4	平均文章長(文字数)	33.4
5	延べ単語数	3397
6	単語種別数	1184

## 4.2 単語頻度解析

表 2 単語頻度解析 (回数)

単語	品詞	品詞詳細	頻度
母	名詞	一般	60
見る	動詞	非自立可能	56
光	名詞	一般	40
父	名詞	一般	35
自分	名詞	一般	31
妻	名詞	一般	24
体	名詞	一般	24
いる	動詞	非自立可能	22
言う	動詞	一般	21
死ぬ	動詞	一般	18
亡くなる	動詞	一般	18
死	名詞	一般	17
パーカー氏	名詞	固有名詞人名	16
光景	名詞	一般	16
思う	動詞	一般	16
感じる	動詞	一般	15
姉	名詞	一般	15
姿	名詞	一般	15
祖父	名詞	一般	15
いう	動詞	一般	14
部屋	名詞	一般	14

『永遠の別世界をかいま見る 臨死共有体験』に収録されている臨死共有体験において、出現回数の多い上位 20 位の単語は表 2 の通りである。最も頻度が高かったのは「母」であり、死の体験を共有する体験時に母親が同席する状況が多かったためだと考えられる。続いて「見る」に関しても非常に多用されており、体験者が共有した何かしらを目撃するケースが多かったためと考えられる。続いて「光」という単語は体験の始まり、または終了時に光に包まれるなどのケースが多いためだと考えられる。

最も頻度の高かった「母」という言葉は 4 番目に頻度の高い「父」や 6 番目の「妻」のように、体験者の身近な人物の死の体験を共有するケースが多かったためよく使用された。

次に頻度の高かった「見る」は、やはり他者の体験を共有して見ている状況で使われ、共有体験の始まりに多用されていた。また、同じ「見る」でも一人称視点と三人称視点の場合など、体験に

よって違う視点で使用されていた。

「光」という単語は「光り輝く玉を目撃した」という体験談で頻出していたが、そのほかにも強い光によって共有体験が開始・終了している場合が多いことや、共有している相手が光に包まれる場合も多いことがわかった。

## 4.3 ことばネットワーク

複数のことばからなる意味的なかたまりを分析することで、体験者の話でどのようなことが話題になっているかを明らかにした。図 1 より、著書の体験者たちの中で「光」「自分」「母」「姿」などに関する話題が語られていたことが明らかになった。「自分」と「光」を中核とする大きなまとまりは、体験談で光が頻出していたことと一致する。また何らかの「姿」をみて会話する、という流れが体験談に幾つか存在していたことがことばネットワークの結果と一致する。



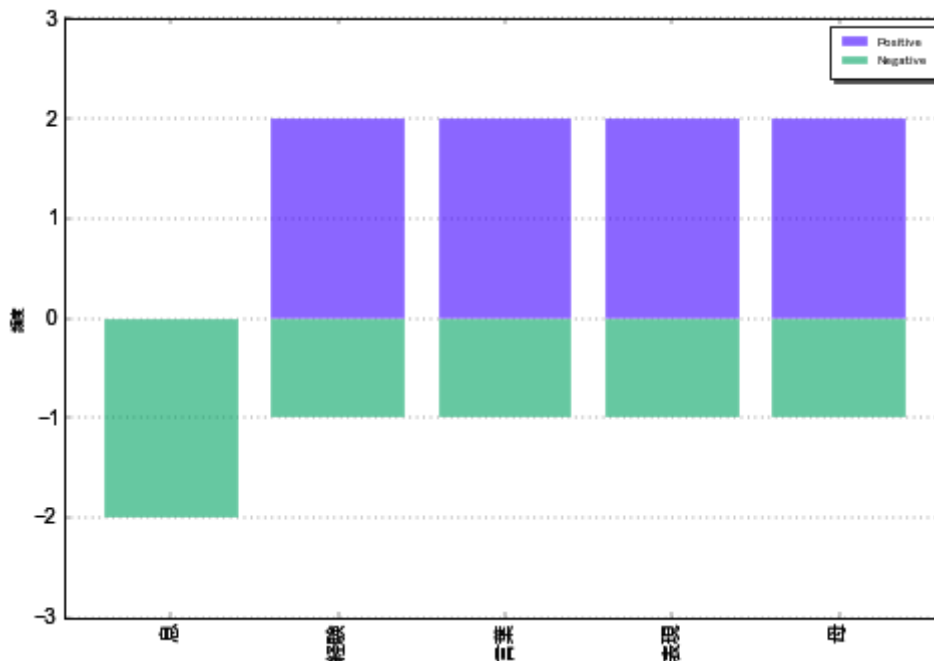


図3 臨死共有体験者の記述の不評語評判抽出

## 5. 考察

単語頻度解析では「母」「見る」「光」、ことばネットワークでは「自分」「光」「母」「姿」などが多く抽出されており、臨死共有体験中に母などの自分に近い人物が光に包まれる、または一緒に光を目撃していることが多いことが明らかになった。

特に、「光」は見ず知らずの人との共有体験中での目撃談もあることから、臨死共有体験の共通点として挙げられると考えられる。

さらに、「母」「父」「妻」などが頻出し、体験を共有している人物が身近な場合が多いことも臨死共有体験の共通点だと考えられる。

また、ことばネットワークの分析結果から、「光」と「自分」が同じ話題のまとまりに出現していることから、他者の体験をまるで自分自身の体験のように感じていることが明らかになった。

評判抽出から臨死共有体験時に「光」を見ることで天国に行ける、幸せになれるといったポジティブなイメージを持つことが多いことがわかった。また、臨死共有体験時に不快な経験をするのが少なく、「息苦しい」ことがネガティブな経験として共通することがわかった。

全体として、臨死共有体験にも、「光を目撃する」「身近な人物との共有体験が多い」といった仮説通りの共通点が認められた。

## 6. おわりに

臨死共有体験は少ないながらも様々な場所で体験談がある。どの人も会ったこともない、関わったこともないという人ばかりだというのに共通点が認められ、「光」に関する体験談が多かった、息苦しさを感じた、家族とともに体験したなど多少なりともパターン分けできることが判明した。

またポジティブな印象を持った体験談も多く、「臨死体験」や「死」という言葉が持つネガティブなイメージが全てではないということを改めて理解することができた。

臨死共有体験や臨死体験についての研究はまだあまり多くはないが、本研究での臨死共有体験での共通点は、この分野の研究を進める上での一助になると私は考える。

## 7. 謝辞

学生研究奨励賞の原稿作成にあたり、**Text Mining Studio** を使用させていただきました数理システム様に感謝いたします。また、ご多忙の中、指導して下さいました和光大学の伊藤武彦教授に心より感謝いたします。最後に、本研究に使用させて頂いた著者レイモンド・ムーディー氏、ポール・ペリー氏、そして本書内の臨死体験者の皆様に感謝いたします。

## 8. 文献

レイモンド・ムーディー ポール・ペリー(2012)

『永遠の別世界をかいま見る 臨死共有体験』(ヒカルランド)

服部兼敏 (2010)『テキストマイニングで広がる看護の世界 : **Text Mining Studio** を使いこなす』ナカニシヤ出版